

(論文内容の要旨)

本論文は、精神分析的心理療法におけるセラピストの営みについて、エディプス・コンプレックス論の変遷の検討を基に論じられたものである。

第1章の第1節においては、**Freud, S.** の個人史を振り返り、エディプス・コンプレックスの発見は、**Freud** 自身の両親とくに母親との関係に目を向けることの困難さによって、色濃く影響されていることが明らかにされた。第2節では、両性性の概念を中心にして **Freud** の理論の変遷を追い、彼による女性のエディプス・コンプレックス論の結論は、現代クライン派の精神分析理論の萌芽を含んでいるとの考えが示された。

第2章においては、第1節で、**Klein, M.** のエディプス・コンプレックス論をまとめ、**Klein** が「完全なエディプス・コンプレックス」について明確にしたことを明らかにするとともに、彼女のいう「良さ」の源泉に両親の結合があることが示された。

次いで、第2節では、現代クライン派によるエディプス・コンプレックス論について詳述し、**Bion, W. R.** の提示した包容機能が、男と女という二つの因子、つまり両性の結合によって働いていることを示し、**Bion** と **Britton, R.** の理論を参考にすることによって、精神分析におけるセラピストの「観察」と「解釈」という二つの機能の協働は、精神分析という過程そのものをエディプス状況の再現へと導いていることが明らかにされた。

第3節では、タビックス方式乳児観察の事例を提示して、包容機能の両性性がどのように実際の母子関係の中で育まれ、営まれていくかを明らかにし、母子関係における父性機能の役割を示した。

第3章においては、精神分析的心理療法における「観察」と「解釈」というセラピストの機能と、その協働であるセラピストの営みについて、「遊び」という観点から考察された。

第1節では、遊びにおいて、「保留する」空間に注目し、それを包容機能と結びつけ、とくにセラピストの「観察」に関わっていることを示した。また、「観察」は、空間の維持という意味で、より母性的な機能を担っているという視点を提示した。

第2節では、「遊び」のもう一つの特徴である偶然性について検討するために、九鬼周造の偶然について詳述された。

第3節では、九鬼の偶然性をもとにセラピストの解釈がもつ機能について考察し、同時に、**Bion** の変形理論から検討した。解釈は、包容機能のうちの父性的な側面を有すること、また、クライアントの無意識的空想が新たな運動を始めるための端緒となることを示した。

第4節においては、精神分析的心理療法事例を通して、セラピストの営みがクライアントとの関係にもたらすものについて考察された。

第1節では、思春期前期の男児との面接過程を提示し、「観察する」位置を維持することの困難さとその必要性について論じた。

第2節では、50代の引きこもり男性との心理療法過程を提示し、強固な「病的組織化」に取り込まれているクライアントに対して、解釈における「事実の選択」という父性的な機能がクライアントの内的世界を動かしていく過程を論じた。

第3節では、遺伝性血液疾患を抱えた男児との心理療法過程を報告し、生き残るために複雑な病的組織化を発展させていた男児に対して、セラピストは、それに巻き込まれながらも、観察し、解釈するという機能を何とか保つことによって、両性機能の結合としてのセラピストの機能が、小さな欠片ではあるが、留まっていた運命の傾きを変え、心的痛みに向き合おうとする働き、すなわち、Bionのいう「考えること」を生み出す極微の点となることが論じられた。

これらの事例の考察を通して、精神分析的心理療法におけるセラピストの営みとは、より母性的な観察とより父性的な解釈という二つの機能の協働であり、これによって両性の結合である包容機能が生じることが明らかにされた。この二つの協働は、精神分析的心理療法をエディプス状況の再現へと導き、その揺れ動きの中で、セラピストが機能し続けることによって、面接場面は創造的なものになり得ると論じられた。

結語においては、週4回を原則とする精神分析と精神分析的心理療法の違いに言及され、週4回を原則とする現代クライン派の精神分析理論を、週1回の精神分析的心理療法に応用するには、「観察」と「解釈」のみに限定することの困難さがあることや今後の課題について考察された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、精神分析的な心理療法過程におけるセラピストの機能を、「観察」と「解釈」という観点から整理し、その過程を事例研究において検討したものである。本研究では、「観察」は母性的機能、「解釈」は父性的機能とされ、両者の結合によって生じる包容機能の重要性が、現代クライン派のエディプス・コンプレックス論を基にして論じられた。

第1～3章は、理論的な考察である。1章では、Freud, S. の個人史を振り返り、彼のエディプス・コンプレックス論は、彼自身の両親、とくに憧れと恐怖を惹起する母親との関係から生じているとの見方が提示されるとともに、「両性性」という視点から見直されて、Freud の論のなかには、常に揺れ動く不安定なものとしてのエディプス状況を描き出す現代クライン派の理論への発展の萌芽が含まれていたと論じられた。次いで、2章では、Klein のエディプス論が再検討され、彼女のいう「良さ」の源に両親の結合があることが見出されるが、そこで、解釈がどのような位置づけをもつかは明らかにされていなかったと論じられた。以上の点から、Klein 以降の現代クライン派で重視されている「タビストック方式による乳児観察」を誕生直後の乳児について2年間行い、包容機能の両性性が母子関係で育まれている過程が示された。次いで、3章では、「観察」と「解釈」の結合としてのセラピストの営みについて「遊び」という観点から検討された。1節では、「遊び」が「留保する」空間となること、すなわち、揺れ動きを伴ったエディプス空間を生み出すと論じられた。2・3節では、「遊び」に生じる偶然性について、九鬼周造の論に依って詳述され、セラピストの解釈が、偶然を生み出すとの観点が示された。

以上の理論的考察において提示されたこれらの観点は、心理療法におけるセラピストの言葉や言動のあり方、とくに「解釈」という作用の内実に迫ろうとする試みとして評価できたが、乳児観察では、初語をはじめとする重要な言葉に言及されていず、また、「解釈」と偶然性との関連についても、ラカン等の理論が参照されていないことによる不十分さがあるといえよう。

次いで、第4章では、3つの事例を通して、上記の理論的立場について具体的に考察された。1節では、同級生にからかわれたことが引き金となって、不登校になっていた思春期の男子との1年半余の面接過程が提示されて、セラピストに対する執拗な攻撃がなされたが、そのことによるセラピストの「観察する」位置の維持の困難さが示されると同時に、「観察」の機能によって、クライエントの羨望に基づいた攻撃性は包容され、抑うつ的感情の保持が可能になることが示された。2節では、シゾイドパーソナリティ障害と診断された50代の引きこもり男性との4年7ヶ月の心理療法過程が提示されて、彼が語る内的対象関係がより三者的な関係へと変化し、現実場面ではまだ動けない

ものの、「外に出ようとする気持ちが出てきた」と語られるに至った過程が検討され、セラピストの「解釈」による父性的機能がクライエントの内的世界を動かしたと考察された。3 節では、遺伝性血液疾患の男児との 3 年 3 ヶ月の遊戯療法過程が報告された。遺伝性疾患という過酷な運命を抱えた男児は、生き残るための複雑な病的組織化を発展させていたが、セラピストはそれに巻き込まれながらも、観察し解釈する機能を懸命に保った。このようなセラピストのあり方によって、彼の中に心的痛みに向き合おうとする動き、すなわち、**Bion** のいう「考えること」の極微の点が生まれたことが示された。

以上の心理療法過程では、着実にクライエントのあり方に変容が生じている。しかしながら、そこにおけるセラピストの機能を「観察」と「解釈」に分けたうえで、その結合として捉えることは、セラピストとの間で起こっていることの相互性、**Bion** が「コンテイナー」という概念で提示した関係性を見落とすおそれが生じる。クライエントの遊びや報告する夢においても、すでに「解釈」が取り入れられていること、日本の心理臨床の現場では、3 例のように深刻な課題を抱えたクライエントが対象になる場合が多いだけに、とりわけ、言葉による「解釈」は慎重さが求められること、一つの理論的立場に立つことは重要ではあるが、同時に、多様な観点にも開かれていないとクライエント理解が狭められてしまうことなどが指摘された。しかし、詳細な理論研究と多様な場での心理臨床実践の真摯な積み重ねを基に、実践に現れ出てくるものからの理論化という非常に重要な作業、とくに、セラピストのあり方を描き出すという困難なテーマに果敢に取り組んだ本論文は、今後一層の深化が期待できる研究であると考えられる。

よって、本論文は、博士（教育学）の学位論文としての価値あるものと認める。また、平成 21 年 2 月 19 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。